

## 41 「錢七」は「錢上」の訛

○郭<sup>1)</sup> 秀梅・岡田<sup>2)</sup> 研吉

現在、一般に準拠されている『傷寒論』、『金匱要略』のなかで、散剤の計量単位として「錢七」という名称が屢々現れてくる。例えば、『傷寒論』大陷胸丸の項で「別ニ甘遂ヲ搗イテ末トシ一錢七」とか、『金匱要略』の麻黄杏仁薏苡仁甘草湯の項に、「毎服四錢七」といった風である。ところで、古代の医師が散剤を計量する場合、その単位として方寸七、刀圭、撮、勺、合、錢七などが、常用されていた。これらの単位は、すべて取薬の器具や方法によって命名されたものであるが、「錢五七」という単位については、十分に理解されておらず、以下それについて論じてみたいと思う。

さて、『本草經集注・序録』には「錢五七」とは「五銖錢の表面に刻まれた五の字をおおう量」と解釈されている。

る。たしかに、これで錢と五の関係は、理解できるが、「錢」も「七」いずれも薬物を取る工具であり、この兩者を結びつけるものはない。これは、どうしたことであろうか。これには論点が二つある。

1 「七」は「上」の間違いである

最も早く、この「錢五七」の問題を取上げたのは江戸後期の著名な医学者であり、考証学者でもあった森立之であった。彼はその著作『枳園叢考』のなかで「錢五上考」を記しており、『傷寒論考注』『金匱要略考注』のなかでも同様な考証をしている。このように「考証学の第一人者」としてたたえられている森立之は、すでに完全といっても良いほどくわしく「錢上」が訛って「錢七」となった過程を考証しており、その功は没す可からざるものがある。だが惜しむらくはその引用文献とした『医心方』『頓医抄』など中国における伝本は疑信参半のものが多く、かくして、この百年あまり中国の学者には関心を払われることなく、すておかれたのであった。いま、ここで、森立之が引用できなかった珍本も並べて紹介し、森氏の未詳の部分を補いたいと思う。

A 敦煌出土医書の残簡

①大英図書館蔵S四四三三号「凡方錢五上以大錢五上以大錢抄取一辺若云半錢即是兩上乃全以柄抄之並用五銖也」上記は医方の残簡だが、主として房中方を記載したものである。「錢五上」という語句は二回も現れてくるし筆跡も非常にはっきりとしている。

②国立フランス図書館蔵P二六六二号

「一熱病六七日結心黄氣急口乾渴大便赤便赤熱宜服瓜蒂三七枚赤小豆二七枚黍米二七枚石搗篩為散温水服一錢上當吐黄」

B 『千金方』（日本天正二年、一五七四年鈔本）

「用葉篇：錢五上トハ、イマ五銖錢ノ五字ヲ辺ルモノニシテ、コレヲ抄テマタ、落チザルヲ度トナス」とある。

2 錢五上の変化過程

「錢五上」を散剤の計量単位として用いてからの変化過程はおおよそ、次の通りである。

、錢五七→五錢七

錢五上

、錢上→錢七

鎌倉時代の医家、梶原性全の著した『頓医抄』の巻四九には『本草』を引いて、「錢五上」と記している。『頓医抄』は常に『新修本草』より引いているので『新修本草』（六五九年）の時代には「錢五上」と記されていたことが理解できる。

以上、その概括を述べたが、本文については北里東洋医学研究所小曾戸先生ならびに真柳誠先生の御指導を受けて完成したものであり深い感謝を表明する次第である。

(1) 順天堂大学医史学研究室研究員)

(2) 町田市・岡田医院)